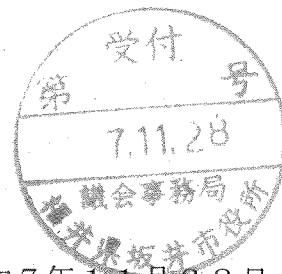


視 察 研 修 等 報 告 書

令和7年11月28日



坂井市議会

議長 佐藤 寛治 殿

会 派 名 創政会
報 告 者 岡部 恭典

1. 日 時 令和7年11月4日(火)～6日(木)3日間

2. 視察研修先 (1) 沖縄県那覇市 第一牧志公設市場
(沖縄県那覇市松尾2-10-1)
(2) 沖縄県浦添市 森の子児童センター
一般社団法人まちづくりうらそえ
(沖縄県浦添市勢理客1-4-1)
(3) 沖縄県糸満市役所
(沖縄県糸満市潮崎町1-1)

3. 視察研修内容 (1) 那覇市第一牧志公設市場の取組みについて
(2) 一般社団法人まちづくりうらそえの多彩な取組と活動内容と児童
センターの運営について
(3) 糸満市の平和教育の理念と実践について

4. 参 加 者 田中哲治 佐藤寛治 戸板進 山田秀樹 岡部恭典 佐藤岳之
6名

5. 内 容 詳 細

那覇市 第一牧志公設市場の取組みについて(現地視察)

●市の概要

- 1) 人 口 312,350人 (7月31日現在)
- 2) 世帯数 162,188世帯 (7月31日現在)
- 3) 面 積 41.42km²
- 4) 概 要

沖縄県の県都として、人口31万人余を有する政治・経済・文化の中心地である。
首里台地(標高165m)から東シナ海に面して、ゆるやかに傾斜した平野部を背景に、
古くから港が整備されるなど、海外との交流拠点として「琉球王国」文化が華ひらい

た街である。気候的には、暖かい黒潮の影響もあって冬でも暖かく、夏は四方の海から吹く風が吹き抜ける、年間の平均気温差が少ない過ごしやすい土地である。アジア太平洋戦争末期の沖縄戦では、街は焦土化したが 1972 年の日本復帰を経て、多くの県民市民の努力と協力によって、現在的那覇市へと発展してきた。21 世紀をむかえ、沖縄都市モノレール・中心市街地及び副都心地区を核としたまちづくりを展開している。また、市民との協働のまちづくりや次代を担う子どもたちの育成を中心とした諸施策を展開し、風格ある県都としての新たな那覇市の実現を目指している。

●視察事業内容および調査内容等

○視察事業概要

国際通りのほぼ真ん中に位置する、むつみ橋交差点。そこから、アーケード街を数分ほど歩くと「那覇市第一牧志公設市場」が見えてくる。建物の老朽化による立て直しのため、2019 年から仮店舗で場所を変えて営業していたが、2023 年 3 月に元の場所で装いも新たにリニューアルオープンした。

この市場は、戦後間もないころ那覇市開南付近に自然発生した「闇市」が前身。1950 年に那覇市がそれらを束ね、市営の市場として開設された。精肉や鮮魚、乾物など沖縄の食材が一堂に会することから「県民の台所」と呼ばれる人気の観光スポットである。吹き抜けの開放的な建物で、1 階は鮮魚店や精肉店など食材及び加工品を扱うエリア、2 階は食堂などの飲食店エリアとなっており連日多くの観光客でにぎわっている。

「那覇市第一牧志公設市場」の魅力の一つとして「持ち上げ」システムがある。「持ち上げ」とは 1 階で鮮魚・精肉を購入し、2 階の食堂で調理してもらって食べるシステムのことで、1990 年に開始されて以降、自らが選んだ魚や肉をその場で食べられるとあって特に観光客に人気である。

市場の入客数は、1 日当たりの平均で 4,961 人、年間に換算すると約 172 万人で、日本人の観光客が約 60%、外国人の観光客が約 20%を占めている。

○視察目的

那覇市第一牧志公設市場における取組み

- ① 地域商業の再生と観光の共存の取組みについて
- ② 観光客対応と地元住民とのバランスのとり方について
- ③ 公設市場として行政支援の在り方について



浦添市「一般社団法人まちづくりうらそえ」の多彩な取組と活動について

●市の概要

- 1) 人 口 115,287人（7月31日現在）
- 2) 世帯数 54,798世帯（7月31日現在）
- 3) 面 積 19.44km²

4) 概 要

沖縄本島の南部地域と中部地域の境目にある市で、琉球王国の古都で、那覇市、沖縄市、うるま市に次いで県内で4番目に人口が多い都市である。また、全国的にも高い出生率で那覇市に隣接するため人口増加が著しい。なお、市の総面積の14.3%を治外法権の米軍基地で占められている。県内でも有数の商業、工業が活発な市である。

「てだこの都市浦添」、琉球王朝発祥の地であり、「津々浦々をおそう（諸国を支配する）」という意味で、これが転じて「ウラシイ」となり、「浦添」の文字が与えられた。「てだこ」とは、かつての浦添が琉球の王府として繁栄した時代の英祖（えいそ）王を、太陽の子と称したことに由来する。

また、2004年1月に「ハンドボール王国都市宣言」を行い、市内の全公立小中学校にハンドボール部があり、日本でも有数のハンドボールの盛んな土地である。

●視察事業内容および調査内容等

○視察事業概要

「一般社団法人まちづくりうらそえ」は、地域の子どもたちの健全な育成や、地域全体のまちづくりに取り組んでいる沖縄県浦添市に拠点を置く法人である。

理念は、「Walk with community」であり、3つの宣言を掲げている。

1. 地域と共に学び育ちあえる市民性教育の発信と住んで良かったと思える地域づくりをします。
2. 地域ぬ宝 世ぬ宝である（地域にとってかけがえのない）ていだぬふぁー（てだての子）を育み支え合うコミュニティを創ります。
3. コーディネーターとして、あるがままを受け入れ、自分らしく幸せに生きる力と生き抜く力を備えた人材の育成を目指します。

また、「教育と福祉の融合」「切れ目ない支援」「地域融合」「人材育成」を団体方針として掲げており、職員間の情報共有を密に行い、地域や子どもたち一人ひとりに寄り添うことを大切にしている。主な事業内容としては、児童センターの指定管理者として、子どもの健全育成の支援を行っており、森の子児童センターと宮城っ子児童センターの運営を行っている。

また、子どもの第三の居場所「みんなの森の子あしびなあ」の運営も手がけており、子どもたちを地域全体で見守り育てる環境づくりを目指している。

○視察目的

「一般社団法人まちづくりうらそえ」の多彩な取組と活動

- ① 基本理念とビジョンについて
- ② 児童センターの運営と活動について
- ③ 子どもの居場所づくりの活動内容について



糸満市 平和教育の主な取組みについて

●市の概要

- 1) 人 口 61,979人 (6月30日現在)
- 2) 世帯数 28,859世帯 (6月30日現在)
- 3) 面 積 46.60km²
- 4) 概 要

糸満市は、沖縄本島の最南端に位置し、沖縄戦の終戦地であり平和記念資料館が設置されている。

沿岸部の糸満地区の住民は、「サバニ」と呼ばれるくり舟に乗り南洋各地へ出漁した糸満漁民で知られ、男は追込み漁、女は漁行商に従事していた。内陸部では、畑作を中心とした農業、畜産も盛んである。また、那覇市に近く、人口が増加し都市化が著しい。1982年には大型船用の糸満漁港が完成し、水産加工工場を立地するなど商工業の一中心として発達している。

伝統工芸に、琉球ガラス村に代表されるガラス工芸（琉球ガラス）や漆器がある。伝統行事「糸満ハーレー」や「大綱引き」が有名。市の南部の旧三和村一帯は、沖縄戦最大の激戦地で、ひめゆりの塔、健児の塔などが建立しその周辺は沖縄戦跡国定公園に指定されている。

●視察事業内容および調査内容等

○視察事業概要

沖縄県は、第二次世界大戦末期、激しい地上戦である「沖縄戦」が繰り広げられ20万人余りの尊い命が失われ、最後の激戦地となった糸満市でも、多くの住民が戦禍の

犠牲となった。そのため、糸満市は「沖縄戦終焉の地」とも言われ、戦争遺構や慰霊塔が多く点在している。悲惨な戦争を二度と繰り返さない、世界の恒久平和の実現のため、糸満市から戦争の悲惨さ、平和の尊さを発信し続けている。

戦後 80 年が経ち、沖縄は先人の努力により発展を続けてきているが、いまだ「基地問題」や「不発弾処理」などの問題を抱えており、不発弾処理は、今なお、平均すると 1 日に 1 件以上のペースで続けられ、全ての処理にはあと 70 年から 100 年かかるとされている。

糸満市総合計画の基本理念を「ひかりとみどりといのりのまち」と掲げ、平成 5 年に平和都市宣言を行った。

ひかりのまち：果てしない希望を抱き、飛躍的前進をめざすまち

みどりのまち：自然を保護し、健康で快適なすみよいまち

いのりのまち：平和を願い、情操性豊かな明るいまち

また、平和教育の基本方針として、糸満市は沖縄戦終焉の地であり、基本理念に「いのりのまち」づくりを掲げていることを踏まえ、幼児・児童生徒の発達の段階に応じた組織的・計画的な平和教育を学校地域が連携して推進している。

戦争の悲惨さや平和の大切さを後世に語り継ぐために、1989 年 6 月 23 日に開館したひめゆり平和祈念資料館の視察を行った。15 歳から 19 歳の女子生徒たちで構成されたひめゆり学徒隊が、陸軍病院に動員され、沖縄戦で体験した悲劇が伝えられている。館内には、ひめゆり学徒の遺品、手記、写真、生存者の証言映像、南風原の陸軍病院壕の一部や伊原第三外科壕内部を再現模型などが展示されており、戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶことができた。

○視察目的

平和教育の主な取組みについて

- ① 平和教育の理念と実践について
- ② 語り部育成事業について
- ③ 戦争遺構の保存と活用について
- ④ 平和関連事業における市民参加と地域連携について



6. 所見・感想等

(田中 哲治)

那覇市第一牧志公設市場の取組みについて

2023年3月のリニューアルオープン後の公設市場は、活気満載の場所として地元の方々や国内外の観光客に親しまれている市場でした。

とくに、組合長からは市場のあらゆる話しやユーモア溢れる説明で、やはり活気がある市場と感じ取れましたし、1階の鮮魚店などで購入した食材を2階の食堂で調理していただき、その場で食べる「持ち上げ方式」も市場の楽しみ方、また観光客にも人気があると伺いました。市場を案内していただいた時も、店員さんが声高くして市場全体に賑やかな声が響き渡り、地元の方々との交流も盛んであると感じました。

本市においても、三国港市場の「にぎわい市場」では、魚介類をはじめカニや甘えびなど新鮮な商品で地域の魅力を発信して展開していますが、今後、市民をはじめ国内外の観光客に魅力あふれる市場を期待したいです。

浦添市「一般社団法人まちづくりうらそえ」の多彩な取組みと活動について

「森の子児童センター」と「宮城っ子児童センター」の2つの児童センターを運営し、0歳から18歳までの子ども達を対象に、地域交流や社会教育事業などを通じて、家庭的で楽しい環境を提案している法人です。代表の大城さんの説明を聞き、自信あふれるお話でとても感動しました。

とくに、学習支援では、近隣中学校との連携も深めており、子どもたちの成長を長期的に支援、地域との連携で地域の子育ての実現や人材育成への注力など、組織全体の活性化が図られていると感じました。

この活動は、福祉のまちづくりを目指すということでは、浦添市の目的と合致しているようでした。

糸満市の平和教育の主な取組みについて

糸満市では、沖縄戦終焉の地として、戦争の悲惨さや平和の尊さを次世代に伝えるため、様々な形で平和教育に取り組んでこられたようです。

慰霊の日と関連付けた平和教育は、小中学校ともに、道徳科と関連させた取組みが多いようです。

また、糸満市では平和記念公園やひめゆりの塔といった沖縄戦跡を「平和祈念・学習の場」として活用しています。

今後、平和を希求し未来へ発信することを目標に掲げて、教育を通じて平和意識の醸成を図っています。

本市においても、遺族会員は約1,000名が会員であり、今後、戦争を知らない世代のさらに子や孫である若い世代に伝承しなければと感じました。

(佐藤 寛治)

那覇市第一牧志公設市場の取組みについて

那覇市第一牧志公設市場は「食」を中心とした生活文化を体感する街歩き拠点としての市場整備を行ったもので、沖縄の食文化の継承・発展する市場、観光地としての魅力向上に寄与する市場の基本方針で整備された。

市場には全87店舗の内、2年契約（更新可）店舗86店舗とチャレンジショップ店舗1店舗（4ヶ月契約）となっている。施設は1階に生鮮食品売場、2階は食堂街となっており、1階で食材を購入し、2階の飲食店で調理してもらい、それを食するシステムになっている。この様な取組みは本市に於いても取り組む必要があると感じた。

浦添市「一般社団法人まちづくりうらそえ」の多彩な取組みと活動について

「一般社団法人まちづくりうらそえ」は市立森の子児童センター、宮城っ子児童センターを指定管理者として運営している。その内の一つ、森の子児童センターを視察した。

当児童センターの運営理念は地域の見守りのなかで、異世代交流の出来る、明るく、楽しい、明日も明後日も来たくなる、お帰りと言ってもらえる第2のお家のような児童館づくり、地域と一緒に学び合える居場所づくり、住んで良かったと思える地域づくりを行うとしている。

また、学校教育・社会教育・家庭教育を融合した「遊びと教育と楽しい」は、豊かな成長につながるとしている。

特に職員が心がけていることは、指導ではなく受け入れ（寄り添う）こと。職員間での情報の共有と方向性の確保。子どもの小さなことに気づいて見逃さない。関係づくりに努力する（信頼関係）のほか何よりも職員の遊び心が地域の子育て支援に必要としている。この様な考え方が、本市の全児童施設にも必要と強く感じた。

糸満市平和教育の主な取組みについて

糸満市は沖縄戦終焉の地と言うことで「いのりのまち」として平和啓発事業を幅広く展開している。戦争を知らない若い世代に平和の尊さと悲惨さを正しく伝えるため、沖縄戦の実情を分かりやすく伝えると共に、歴史を後世に伝える人材を育成する「平和の語り部育成事業」をはじめ多くの平和に関する事業を進めており平和に対する強い思いをひしひしと感じた。

また、小中学校の平和教育では、小学校96%、中学校では92%が平和教育を主体的に取り組める学習の構築を進めている。

特に、中学校では毎年6月の慰霊の日に合わせ新聞づくりをメインに平和学習を実施している等市全体での平和教育の取組みに感銘を受けた。

(戸板 進)

那覇市第一牧志公設市場の取り組み

闇市発祥の市場を整理するため、1950年市営市場として開設。その後老朽化に伴い、2023年に新市場として開設し、現在は、地元住民のみならず観光客にも人気のスポットであり、地元住民より、観光客の方が多く、外国人観光客も20%を占めている。

1階は鮮魚・精肉・生鮮食品・乾物・土産品、2階は飲食店（沖縄料理・軽食・ジェラート等）、3階は調理体験室・多目的室・管理事務所などが入居する複合施設となっている。

この施設の特長は、「持ち上げ」というユニークなサービスで、1階で買った鮮魚・精肉などを、2階の飲食店に持ち込んで調理してもらうことが可能である。

建物の管理は市が行い、テナント料として1階5,500円/㎡、2階3,900円/㎡があるが、収支はマイナスのようである。

入居するテナント数は、87店舗2年毎の更新となっている。この他、4ヶ月限度としてのチャレンジショップも入居している。

また、市場総合案内所を設け、周辺の案内や、商店街がアーケードで繋がっていることで、周辺の環境もいいことから、多くの観光客が多いとのことで、アーケードによる相乗効果が非常に重要であるとのことであった。

坂井市でも三国港朝市を開催し、買った商品を炭火焼できるようにしているが、観光客が多く訪れるような工夫が必要ではないだろうか。

一般社団法人まちづくりうらそえの多彩な取り組みと活動

一般社団法人まちづくりうらそえは市立森の子児童センター指定管理者として受託のほか、様々な事業を展開、「教育と福祉の融合」や「切れ目のない支援」「地域融合」「人材育成」を掲げている。

受託している森の子児童センターでは、地域の見守りの中で異世代交流の出来る、明るく、楽しい、明日も明後日も来たくなる、お帰りと言ってもらえる第2の家のような児童館づくり住んで良かったと思える地域づくりを行い、色々な状況にある子供たちと関わる職員と、投げない、捨てない、投げ出さない、を共有している。

センターでは、夜間開放日を設け、中学生から高校生を対象とした学習支援を行うほか、近隣中学校へ学支援に入っており学校との連携も行っている。また、休眠預金等活用制度などを利用した、食事支援も行っている。

センターのほかに、児童クラブ、民間こども園が一つの建物の中に混合されているのも特徴であり、小学校に隣接されていることで、ランドセルを背負って、児童クラブにくる子、児童センターにくる子と様々なようである。

大城理事長が、昔不登校でここへ来ていた子が、今は職員として働いているんですよと嬉しそうに話してくれたことが非常に印象的であった。

地域の子は地域で育てるといわれているが、坂井市内にも子ども食堂が増える中、今一度地域と子ども教育の関わり合いを協議する場が必要ではないだろうか。

平和教育の主な取り組み

沖縄県は、第二次世界大戦末期、激しい地上戦である沖縄戦が繰り広げられ、20万人余りの尊い命が失われた。最後の激戦地となった糸満市でも、多くの住民が戦禍の犠牲となった。そのため糸満市は沖縄戦終焉の地と言われ、戦争遺構や慰霊塔が数多く点在している。このような歴史的背景を持つ糸満市は、「ひかりとみどりといのちのまち」を基本理念に掲げ、平成5年に平和都市宣言を行っている。

6月17日から23日までを「平和週間」と定め、この期間を中心に年間を通して平和記念推進事業を実施し、その一環として、沖縄戦の記憶を次世代へ正しく伝え、戦没者に追悼の意を表すとともに、平和の発信地として、世界の恒久平和を祈念することを目的として糸満市平和記念祭を開催し、慰霊の日を迎えるにあたり、布巾で平和の礎を拭き清め、沖縄戦で亡くなられたすべての人々に追悼の意を表すとともに、命の尊さや平和の大切さを考える機会とする「平和の礎拭き清め」、沖縄戦の悲惨さと平和の尊さを次世代へ伝えることを目的として、平和をテーマにした「平和関連舞台演目」を実施している。

このほか戦争を体験していない世代へ、平和の尊さと悲惨さを正しく伝えるための「平和の語り部育成事業」を実施しているが、戦争体験者が年々少なくなり、語り継ぐことが難しくなっている。また、戦争の記憶継承は「人からモノへ」と言われ、避難豪（ガマ）や被害を受けた構築物は「物言わぬ語り部」として若い世代に現実を伝えることのできる生きた教材として活用され、保全されている。

また、平和教育に取り組み、幼児・児童生徒の発達の段階に応じた組織的、計画的に平和教育を推進し、生命の尊重と個人の尊厳を基本に、思いやりの心や寛容の心を育むとともに、我が国と郷土を愛し、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する人材を育成するため、学校地域が連携し平和教育を推進している。

今現在も世界の中で戦争、紛争が続く中、福井県においても、昭和20年7月福井空襲で多くの人が犠牲となった命の尊さ、平和の有難さを思い知った研修となった。

（山田 秀樹）

那覇市第一牧志公設市場の取組み

第一牧志公設市場は、戦後間もない頃に自然発生的に闇市がたち、1950年にそれらをたばねた那覇市営の牧志公設市場として開設された。1972年、沖縄の本土復帰の年に建て替えられ市民・県民の台所として親しまれてきた。アーケードの完成が一因となり、県外や外国人の観光客にも人気のエリアとなった。

その後、シンガポールなどアジアの食堂などをモデルとした、一階の店舗で購入した食材を二階の食堂で調理し食べることができる「持ち上げ」と呼ばれるサービスが始まり、沖縄文化・食文化への理解や文化交流としての面も生まれた。

食材は見たことのない大きなエビや、貝、イカに加えなじみの魚、肉類がひしめいており「持ち上げ」を利用して大勢の人や家族が食事を楽しんでいた。因みに持ち上げ調理料金は3品で550円を支払い、刺身、焼き物、煮物、天ぷらなど調理の選択肢も多い。2023年にリニューアルされたが、その際にコストの掛かるアーケード撤廃の話が出たものの地

元や、商売関係者の意見を取り入れ、アーケードが残され、整備され、国際通りから流れてくる観光客は風雨にさらされることなく市場を楽しめる。また、地元の客に飽きられないよう、チャレンジショップを用意し新しい商売を取り入れることに余念がない。実際に商売をしている人の声や本音を取り入れ、然るべきものが必要なところに収まり、理にかなった賑わいを醸し出している。ぜひ見習いたい。

「一般社団法人まちづくりうらそえ」の多彩な取組と活動

子どもの「第三の居場所事業」として活動するうらそえ。子どもたちの困難は、家庭や学校だけでは対応が難しく、そもそもの困難が家庭や学校に起因する場合もある。そのため、子どもが孤立しやすい放課後の時間帯に家庭や学校以外の場である「第三の居場所」で過ごすことで、信頼できる大人や友達と安心して関わりを持ちながら、将来の自立に向けて「生き抜く力」を育くむ取り組みを行っている。

居場所では、食事など基本的な生活習慣を整えた上で、人や社会と関わる力を高める教育や、学習支援の実施には如何に顔見知りの大人が出入りしてコミュニケーションを築くことが大切であるがここでは児童センターの職員やボランティア、各種団体、企業、地域の方々が子どもたちを見守り、自立をサポートしている。

代表の大城さんは、大事なものは、地域の色々な大人たちが子どもに関わることであり、児童センター運営は地域づくりにあると考えており、奔走した結果が大きく実っている。地域のつながりが希薄である現代、日本全体でこのような取り組みが必要と考える。

本市においても安心して過ごせる居場所がないまま孤立してしまう子どもゼロを目指し、取り組んでいきたい。

沖縄県糸満市の平和教育の主な取組みについて

糸満市では、沖縄戦の激戦地であったという歴史的背景から、平和教育を重要な課題と位置づけ、平和教育を通じ、戦争の記憶を風化させないとともに、未来に平和な社会を築いていくための教育を推進している。

学校での平和学習や、ひめゆり平和祈念資料館を始めとする市内の戦跡や関連施設での活動を通じて、戦争の悲惨さを伝え、平和を希求する心を育み、「戦争は絶対にやってはいけない」という意識や、家族への感謝の気持ち、そして戦争を語り継ぐことの重要性を学んでいる。

ひめゆり平和祈念資料館

戦争の悲惨さや平和の大切さを後世に語り継ぐべく、1989年6月23日に開館した資料館。沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の生徒たちは、戦争中の社会で育ち、当時の教育によって軍国少女に育っていき、ひめゆり学徒隊として、沖縄陸軍病院に動員され、引率教師を含め227人が亡くなった。戦後80年を迎えたいま、坂井市においても慰霊祭に携わる人も減少していき、風化が心配される。

世界各地で戦争が絶えないが、日本は、先の大戦で甚大な被害を受け、その悲惨さを身をもって体験した。これらを風化させることなく、これからの世界平和を考えていくことが大切だと感じた。

(岡部 恭典)

・沖縄県那覇市第一牧志公設市場の取組みについて

那覇市第一牧志公設市場は戦後の混乱期に市民が食料や生活物資を売買する場として自然に広がった市場をもとに、1950年12月に市営市場として正式に開設された。その後、火災で焼失するも建て替えられ、市民と県民の暮らしを支える「台所」として親しまれてきた。老朽化に伴い仮設市場を経て2023年に新市場が完成し、「沖縄の食文化発信拠点」として沖縄の食文化や歴史を感じられる場となっている。

施設の特徴は、1階で鮮魚・精肉・青果などの生鮮食品を販売し、購入食材を市場内食堂で調理して食することができる「持ち上げ」システムを導入するなど先進的な取り組みが行われていた。2階は、食堂とお土産店、3階は多目的室や調理体験スペースを設置し、食文化イベントや学校・ホテルとの連携事業を展開しており、市場は、「食文化発信」「観光拠点」「地域交流の場」としての役割を果たしている。

さらに、商店街アーケード設置の取組みも特徴の一つである。アーケードは、公設市場建替えに伴い撤去されていたが、協議会の主導で再整備された。市場中央通り新アーケードは2024年に完成し、幅6m、長さ50m総事業費約1億9千万円で市補助4/5を占めている。商店街アーケードは「商業環境改善」「回遊性・集客力の向上」と「地域の一体感維持」大きな効果を発揮している。

市場とアーケードが一体となることで、地域商業の持続可能性と観光資源としての魅力が強化されていることを強く感じた。

・「一般社団法人まちづくりうらそえ」の多彩な取組と活動

一般社団法人まちづくりうらそえは、地域の子どもたちを「まちの宝」と位置づけ、居場所づくりや学習支援を通じて子どもたちの健やか成長を支える活動を展開している。子供支援の特徴的な取り組みとして

▶ 居場所づくり

森の子児童センターを拠点に、放課後や休日に安心して過ごせる空間を提供。家庭環境に左右されず、子どもたちが「自分の居場所」と感じられよう工夫されている。

▶ 学習支援と生活サポート

学習の遅れや生活習慣の課題を抱える子どもに対し、地域のボランティアや大学生が学習支援を行い、生活リズムの改善や自己肯定感の向上を促している。

▶ 地域交流イベント

夏祭りや地域清掃活動などを通じて、子どもと地域住民が交流。世代を超えた繋がりを育み、地域全体で子どもを見守る仕組みを強化している。

▶ 体験活動の充実

農業体験や自然体験を取り入れ、子どもが「生きる力」を学ぶ機会を提供。都市部では得にくい自然との触れ合いを大切にしている。

▶ 多様な家庭環境への対応

経済的困難やひとり親家庭など、支援が必要な子どもに寄り添い、食事提供や相談支援を行うことで「誰一人取り残さない」姿勢を実践している。

このような取り組みは、地域連携の強さいわゆる行政・学校・地域住民が一体となり、子どもを支える仕組みを構築している。また、活動の企画や運営に子ども自身に関り、自己表現の場を広げることにより子どもの主体性を尊重している。さらに、子ども支援を通じて地域コミュニティの活性化につなげており、持続可能なまちづくりを目指し活動を行っている。

「一般社団法人まちづくりうらそえ」の活動理念が明確に示されており、「森の子児童センター」の運営理念は、地域の見守りの中で異世代交流のできる、明るく、楽しい、明日も明後日も来たくなる、お帰りと言ってもらえる第二のお家のような児童館づくり、地域と一緒に学び合える（市民性教育）居場所づくり、住んで良かったと思える地域づくりを行う。

自立に向けた切れ目ない支援、福祉と教育の融合を目指しており、そのため色々な子どもたちと関わる職員に共通していることは、「投げない、捨てない、投げ出さない」を心がけているとのことであり、職員の優しさと強さを感じることができた。

・「平和教育の主な取り組み」について

糸満市は、「沖縄戦終焉の地」として、平和都市宣言を基盤に「語り部育成事業」や地域全体を学びの場とする教育を展開している。これにより、戦争体験を知らない世代が平和の大切さを継承する仕組みを整えている。

平和教育の特徴的な取り組みとしては

➤ 平和都市宣言

沖縄戦で約 20 万人が犠牲となったれきしを踏まえ、市民と共に「命どう宝」を未来へ継承する理念を掲げている

➤ 平和の語り部育成事業

中高生が慰霊碑を巡り、建立の経緯や戦争の実情を学び、発表を通じて「次世代に伝える人材」として育成されている

効果として若い世代が主体的に平和を語り継ぐ力を養い、地域社会全体で記憶を継承する仕組みを形成している

➤ 平和教育フォーラム

高校生・教員・教育関係者が参加し、戦争体験者の声が減る中で「どう伝えるか」を議論。パネルディスカッションを通じて新しい教育手法を模索している

➤ コミュニティ・スクールの導入

学校・家庭・地域が一体となり、地域の戦争遺構や伝統行事を学びフィールドに活用。平和学習を地域文化と結び付けて展開している

糸満市での研修を受けた後「ひめゆり平和祈念資料館」を訪れた。沖縄戦で看護要員として動員され、多くの犠牲となった「ひめゆり学徒隊」の体験を証言映像や壕の模型などを見るにつけ、戦争の悲惨さと平和の尊さを強く感じるとともに二度と戦争を起こしてはならないと深く実感させられた。

(佐藤 岳之)

○那覇市第一牧志公設市場の取組みについて

那覇市内の中心部に位置する第一牧志公設市場は、令和5年3月19日に新しく建て変わり、沖縄県の食の魅力の発信拠点や「食」を中心とした生活文化を体感できる街歩き拠点として整備され、中心市街地の回遊性の向上や集客力を高め、来訪者や観光客の拡充に大きく寄与している施設である。店舗のレイアウトは市場の外周で、のれんを構える外小間を取り入れるなど、工夫されていた。また、1階で食材を購入後、2階の飲食店で調理して食することができる、持ち上げシステムを導入する等、先進的な取組みが行われている。3階は、調理体験室や多目的室で、会議やイベント等の目的に合わせて柔軟な利用が可能で、多くの市民に利用されていた。

データとして、市場の1日当たりの平均入客数は約5,000人弱で、その内訳は地元客12%、日本人観光客69%、外国人観光客19%である。さらに、取材や団体見学も受け入れており、広報活動も積極的に行われている。本市においても、観光地において、観光客、インバウンドへの対応の必要性、重要性を痛感した。

○「一般社団法人まちづくりうらそえ」の多彩な取組みと活動について

坂井市と単純に比較できないが、地域住民が主体となった様々な取組みと行政からの市援体制が充実している。また地域と行政が共に、子供たちがおかれている現状を見極め、子供ファーストで細やかな対策が実行されている。子供の貧困に対する対策は、未来の投資であると考え。地域民と行政の施策は参考にすべきであると感じた。

○平和教育の主な取組みについて

糸満市は、第二次世界大戦末期、激しい地上戦である沖縄戦が繰り広げられ20万人余の尊い命が失われた最後の激戦地で、戦争遺構や慰霊塔が数多く点在する地だった。沖縄の戦後復興は、遺骨の収集から始まり、戦没者の御霊を弔うための納骨所や慰霊塔、碑が建立された。

戦後79年が経っても、基地の問題や不発弾処理などの問題を抱えていた。不発弾処理は、今もなお、平均すると1日1件以上のペースで続けられ、全ての処理が終わるまで、あと70年～100年かかるといわれているそうである。

ひめゆりの塔なども見学をし、戦争の残酷さを体感し、戦争は二度と起こしてはいけないこと、戦争の準備をしないで、平和の準備をすることが、今こそ重要な事であると再確認する良い機会になった。

自分の子ども世代に平和な日本を残す事が、今、一番にやらなければならない事である。戦争体験者へのインタビュー映像を残す、映像記録事業を行っていた。それらは、教育現場での平和学習に活用されており、市内の小中学校や県内の図書館に配布していた。糸満市のYouTubeでも見られるという事であった。一部を視聴したが、淡々と語る戦争体験は、想像を絶するものだった。坂井市の子どもたちにも、DVD視聴など、平和の事を考える機会が必要なのではないかと感じた。